

# 学校教育がつくったモダンな女性の身体と ファッション

——「誘<sup>いざない</sup>いつつ拒む乙女」から「夫を魅了する貞淑な主婦」へ

大阪大学教授 木村涼子

## [Summary]

### Schooling and the Making of the Modern Female Body and Fashion

Ryoko KIMURA

Professor, Osaka University

What is known as “gender-based science,” which is based on the assumption that men are naturally superior in intelligence to women, developed together with the advancement of modern science. In modern Japanese society, “gender-based science” was used to provide basic justification for gender discrimination in school education. This is represented by the male-oriented school systems and curriculums developed especially for secondary or higher education, under which male students were encouraged to devote themselves to study in order to move up in the world, while female students were educated to become dutiful wives and devoted mothers. An underlying concept behind education was the division of roles between men and women: the masculine role being oriented towards work in the public sphere and the feminine role being based on functioning as a homemaker in the private sphere.

In the Taisho Period (1912-1926), a Western-style school uniform for female students – a sailor-style tie top and skirt – was widely introduced. The sailor-style school uniform was seen as a symbol of pure innocent feminine beauty. Institutionalized Western-style school uniforms reflected a modern perspective on the shape of the body: both the masculine body and the feminine body.

After graduating from high school, women were expected to work hard to become dutiful wives and devoted mothers, and for this purpose women’s magazines played the role of textbooks, serving as an extension of school education to produce good wives and wise mothers. Such magazines explained the importance of a woman being not only a homemaker dedicated to doing household chores and raising children but also being a love interest for her husband, who would return home

tired, so that he could feel relaxed and mentally fulfilled. Women's magazines also emphasized the need for a woman to be a beautiful wife in order to maintain a romantic relationship with her husband, saying that a homemaker could not make her home a happy paradise without being loved by her husband. Consequently, homemakers needed to continue to learn how to develop a sense of style and suitable behavior through women's magazines. Even after completing their school education, women made continuing efforts to become dutiful wives and devoted mothers according to the content of women's magazines.

### 近代的な性差は学校がつくった

近代科学の発展を背景に発達した「性差の科学」とも呼ぶべき研究をご存じだろうか。「性差の科学」によって主張された性差の代表的なものは、男性の脳の方が重く、すなわち男性の方が知的だという説である（イーグルラセット 1994、スターリング 1990）。生来的に男性が女性よりも知的に優位であるとする「科学的」知見は、高等教育から女性を排除する根拠の一つとなった。明治後半から昭和初期にかけての新聞や雑誌には、男女の脳の重量や働き、言語的能力、科学的能力、性格、手の器用さなど、さまざまな生来的な違いに関する「学理的な証明」がつぎつぎと紹介されている（たとえば、「男子の脳と女子の脳」（1892年10月24日読売新聞朝刊）、「女はお饒舌—学理上の証明」（1912年9月6日読売新聞朝刊）など。（苅谷・木村他 2000）（Fig.1）。

「性差の科学」言説は、学校における性差別を正当化する機能を果たした。よく知られているように、戦前日本の学校教育は、性差を前提とした男女別のシステムで運営されていた。すべての学校段階において男女別学が基本とされ（例外的に初等教育低学年について共学容認）、中等以上の教育段階については学校種別とカリキュラムが男女別かつ男性優位に体系化されていた。同じ中等教育段階でも、男子向けの中学校（旧制）の方が女子向けの高等女学校（旧制）よりも、就学年限が長く、カリキュラムの専門性も高かった。男子向け中学校の方がより高次の教育をしていたにもかかわらず、女子の中等教育機関が「高等」女学校と名づけられていたことからわかるように、女子にはそれ以上の高等教育は用意されていなかった。高等教育の中心的機関である大学は、欧米と同じく女性に門戸を閉ざしていたのである。近代学校は、教育という名の下に、近代的な性差を「後天的に」作りだしてきたのである。

## 中等教育段階における近代的な男女の対比

教育体系が男女別となる中等教育段階では、生徒たちが第二次性徴期を迎える、換言すれば思春期にあたることで、性差を非常に強く意識した教育をおこなっていく。カリキュラムが分化し、男子には立身出世のための刻苦勉勵を奨励する一方で、女子には良妻賢母主義が教育の基本理念とされた。日本社会における中流階級の形成を目的としていた男子教育政策に対応するものとして、女子対象の中等教育施策は、中流階級の職業人である男性の妻として家庭を建設する良妻賢母の育成を目指した。中等教育段階整備のプロセスの中に、「公的空間」で活躍する職業人である男性と「私的空間」の家庭を守る良妻賢母という、初等教育段階では未分化であった〈女〉・〈男〉概念が立ち上がるのを見ることが出来る。

それは学校制服の歴史にも如実にあらわれている。明治当初、男子の学校制服は官吏の服装を基準とし、和装の書生姿から洋装に移り変わっていく。1880年代後半以降は、軍服を模した黒色詰襟・金ボタンの「学生服」が男子の学校制服として定着していく。軍服がモデルとなったのは、当時の学校教育が軍隊生活に代表されるような集団的な規律行動へのコミットを重視していたからだといわれる。

女子の場合は、制服制度の導入が男子よりも遅れただけでなく、複雑な道筋をたどる。明治当初は、男性同様羽織袴の「女書生」姿がみられたが、いったんは女ものの和服に回帰、鹿鳴館時代には一転して時代風潮を反映したバツスル調の洋装制服、さらに再度和服にもどった後に、活動性という観点から機能的な女袴と筒袖改良和服が考案される。明治末期にはそうした改良着袴姿が和装制服として採用されるようになり、いわゆる「えび茶式部」「すみれ女子」と呼ばれる女学生スタイルが確立した。本田和子が指摘したように、袴姿の女学生スタイルは「『風』との親和関係」により、男子の堅苦しい学生服とはまったく異なる魅力を発揮した(本田1990、67頁)。

また、明治後期から大正期にかけて、まだ珍しかった女学生を主人公とする小説も流行した。明治時代の女学生小説といえば、小栗風葉の『青春』が有名だが、それ以降も多く純文学・通俗小説作家が、性愛とは切り離された空間である学校に通う女性を、男性主人公の恋愛対象あるいは恋愛する主体であるヒロインとして配置した。女学生は、性的であることを禁じられているにも関わらず、性的な魅力を放つ姿として、挿絵にもよく描かれた(Fig.2)。

## ロマンティックでけがれなき乙女を象徴する洋装制服

その後、女子中等教育の発展と女子に対する体操教育の展開によって、洋装制服が普及していく。女子の体操教育発展に貢献した井口あくりが、欧米への留学での見聞をもとに、女子にふさわしい体操着の必要性を主張し、ブルマーズやセーラー服を紹介した。セーラー服もまた、機能性を重視して海軍兵の制服をもとにつくられたものであった。体操着の改革をステップとして、大正期にはセーラー服の上着にスカートという洋装制服が採用されていく。1930年代には全国のほとんどの高等女学校・実科高等女学校において洋装制服が制度化されることとなる（女子制服の歴史については難波（2012）に詳しい）。

女性の洋装制服の典型であるセーラー服は、もともとは海軍の制服がモデルではあるが、それをかなり柔らかなかたちアレンジしている。女子の洋装制服は、可憐で柔らかく、夢見る少女イメージの構成とマッチして、その魅力を発揮していく。欧米でもまず子ども服として流行し、それがとりわけ少女のためのデザインとなっていく。

胸元で揺れるリボン、風にはためく広い襟、身体の動きに応じて波打つスカート。乱暴な動きには適さないが適度な「揺れ」が似合うセーラー服は、清楚な女性美を表現するものであり、学校が理想とする「良妻賢母」になっていく「汚れなき乙女」を視覚的表現において象徴したものといえよう。制服を着た女学生は、その清潔でありながら、花開こうとする女らしさを感じさせ、周囲の視線を引き寄せる。しかし、当然ながら当時の性道德の厳しさから言って、視線は引き寄せても、何らかの誘惑を受けた場合は「乙女」の潔癖さで拒絶する。なぜならば、純潔は、将来の良人のために絶対に守られねばならないものだから。女学生の制服は「魅力的ではあるが、だからこそけがれなき乙女であることに価値がある」という理念を、服装規定の形で制度化したものといえよう。

また、それが学校の制服だけではなく、女学生にふさわしい私服を考えた際にも、同じような基準でのファッションが婦人雑誌などで盛んに構築されていたことも興味深い点だ。女学生にふさわしい美しさを保つための秘訣なども婦人雑誌はグラビアで丁寧に教えている（Fig.3）。

## 「男らしい」身体と「女らしい」身体の創造

男女で区別された学校制服は、それぞれ「女らしい」身体と「男らしい」身体の創造と結びついている。和装よりも機能的とされた洋装に向かう制服制度化の過程は、近代的身体の育成と平行だったといえよう。男子は、産業労働および軍事に適合的な強健で敏

捷な肉体づくりと、集団行動や競争競技に向けたエートスの内面化がもとめられた。女子に対しては、男子のような強健さはもとめられなかったが、「女だからかよわい」ものといった感覚、従来の日本女性の姿勢の悪さや動作の緩慢さ、運動不足による虚弱は、非近代的なものとして批判された。「優良」な国民を生み育てる健全な母体になるべく、健康さと強さを養うことが期待されるようになり、女性のスポーツも称揚されるようになる。

近代社会がもとめる活動的で健全な身体育成のために、学校が用意した教科は「体操」だった。「体操」は男女ともに必要と考えられたが、その内容や必修時間数には男女で違いがみられた。初等教育では、男子には主として「兵式体操」を、女子には「普通体操」もしくは「遊戯」を授けるよう定められていた（1891年、小学校教則大綱）。中等教育カリキュラムでも、中学校では「兵式体操」や「撃剣・柔術（後に剣道・柔道と改称）」などが重視される一方、高等女学校では中学校よりも時間数が少なく、内容も「普通体操」「遊戯」中心で、さらには舞踏など女子向けの種目が考案されたりもした。全般的には男子の場合の方が体育教育の位置づけは高かったが、女子体育もおろそかにできないとの声は常にあがっていた。明治末期には、前項でふれたように女子の運動服の導入をきっかけに服装の改善と体力増強が関連づけて議論され、高等学校女学校長会議でも協議されている（上沼1968）。

しかし一方で、「体操」教育によって、日本女性の優美さやおやかさが崩壊することも懸念されていた。こうした懸念は、「体操」による女子の「男子化」論とも呼ばれ、欧米においても議論されていた。女性の「男子化」に警鐘を鳴らす声に応じて、女性にふさわしい、女性美をそこなわないものとして、舞踏（ダンス）など女子むきの体操が考案されていく。そうした「女らしい」体育の伝統は、戦後のカリキュラムにもひきつがれていく（Fig.4）。

## そして「良妻賢母」へ

高等女学校を出たら、今度は婦人雑誌で主婦の勉強を。こうした言葉が、マスメディアの発達とともに、よく語られるようになっていた。婦人雑誌は高等女学校の良妻賢母主義教育の延長の役割を果たしていた。

大正期から昭和初期にかけて婦人雑誌が本格的に大衆化し、『主婦之友』（主婦之友社、大正6年創刊）、『婦人倶楽部』（大日本雄弁会講談社、大正9年創刊）、『婦人公論』（中央公論社、大正5年創刊）など、人気のあった婦人雑誌のほとんどは、理想とする良妻賢母を図像化した美人画で表紙を飾った。美人画を表紙にもちいた婦人雑誌のうち、「主婦」をターゲットとして商業的成功をおさめた『主婦之友』をとりあげ、表紙絵の歴史を追っていこう。

『主婦之友』の表紙は、創刊以来一貫して美人画で通している。創刊時からの表紙をな

がめてみると、そこにはゆるやかな変化がみとめられる。1917 (大正6) 年から 1920 (大正9) 年にかけての表紙画は、石井滴水や森田久、島成園ら日本画家によって描かれている。石井・森田の描く女性像は、丸髷に和服姿がほとんどで顔のつくりも表情がなく、浮世絵の美人画にみられるような平板さが目立つ。うつ向きかげんで身をすくめたような姿勢が多く、はかなげで弱々しい印象を与えるそれらの美人画は、地味で従順な主婦像を表現している (Fig.5)。

『主婦之友』の表紙はその後 1922 (大正11) 年から写実的な洋画を採用し始める。浮世絵調日本画から写実的な油絵の「絵画主義」の時代を迎え、その傾向は 1930 (昭和5) 年までつづく。1921 (大正15/昭和元) 年の一年間を担当した多田北鳥は彼らしい優しいふんいきの女性像を、1927 (昭和2) 以降延べで二年半という長期にわたって表紙絵を描いた岡吉枝は頬のふっくらした健康的でふくよかな女性像を描写した。この時期の表紙絵は、創刊当初の浮世絵調日本画時代のように平面的・類型的ではなく立体的・写実的であり、健康的で人肌の暖かさを感じさせるものとなっていく。女性像の表情も徐々にやわらぎ、豊かになっていく。多田や岡らが描く豊かな頬をもつ女性たちは、ときどきかすかに白い歯をみせて微笑んでいる (Fig.6)。

その後、1930 (昭和5) 年7月に登場した松田<sup>とみたか</sup>富喬によって、『主婦之友』の表紙画は画期を迎える。それまでの美人画が、ぎこちなさをともないながらも徐々に表情をほころばせてきていたのを引き継いで、松田はそれを一層推し進め、華やかに笑う美人図像へと発展させる。松田の描く美人画は、面長の顔に二重まぶたの明るい大きな瞳とすっきりした鼻、紅を差した適度に厚みのある唇をもち、若々しい色気を感じさせる。ほとんどの絵が、にっこりあでやかに微笑むか、歯をはっきり見せて笑っており、表情に喜びや若さがあふれている。また、首をかしげたり、手を口元にもっていったりという、コケティッシュなしぐさが多くみられる。松田の描く美人画は、非常に好評のうちに通算7年間も続いた。近代的な主婦役割を担う美人の典型的な図像が確立されたといっても過言ではなからう (Fig.7)。

### 「良人を魅了しつづける主婦」へ

主婦にもとめられること、それは第一に家族の団らんを司る「女神」となることだ。家族一人一人が心やすらぐ「安息所」としての「ホーム」をつくりあげ維持する責任が主婦にはある。当時の婦人雑誌の記事では、「家庭の太陽」となることが主婦のつとめであると盛んに説かれている。『いつ見ても、奥様の顔は晴れやかだ』といふ御家庭なら、子供

や女中どころか、出入りの者まで、いつもニコニコ、愉快的なものにて候。—中略—全家族の人々を、いつも平和に、いつも円満に、賑やかにしておかうと思召すなら、奥様だけは如何なるときでも、お顔を曇らせては相成り申すまじく候。悲しくとも笑ひ、腹が立っても笑ふ、これぞ奥様修行の奥義にて候。」(「一家揃って仲よく暮らす秘訣九ヶ条」『主婦之友』1933年11月号)。

夫に対しては、その仕事・趣味・心の機微のすべてを理解し、サポートする良き伴侶であることがもとめられる。「男は仕事、女は家庭」という性別分業に則った内助の功が主婦の役割だが、単に家事・育児をきちんとなすだけでなく、仕事から疲れて帰ってくる夫を癒し、彼の精神生活を豊かなものにする恋愛対象でもありつづけなくてはならない。近代家族が夫婦の恋愛感情を基本的要素とするところから、夫との関係も新しいスタイルが模索されている。

しかも、主婦は質実な良妻賢母であるだけではだめなのだ。妻にのみ姦通罪があるような、男性に甘く女性に厳しいといったように、性道徳がダブルスタンダードの時代である。うっかりしていると、良人はすぐに浮気してしまう。そうした嘆きや悩み相談は婦人雑誌の中にあふれている。

だからこそ、夫から「愛されつづける妻」となる必要性と方策が、世の人妻に認識されるべきこととして啓蒙されるのである。早稲田大学教授中桐確太郎は、「いつも良人の恋人たれ」とのタイトルで、結婚生活と恋愛生活を分けて考えることが、結婚生活の不幸を招くと論じる(「新夫婦和合の秘訣六ヶ条」『主婦之友』1929年4月号)。「永久に良人に愛される妻」とはいかなる妻なのかが、婦人雑誌の一大テーマである。「女性は愛に生きゆくもの、まして、良人の愛こそは、妻の生命でなくて何でせう！〈良人の愛情を自分一人へ、しつかりと不断に掴んでいたい！〉これぞ世にある妻の身に、誰しも祈る当然の願い…」(「夫の愛をしつかりと掴む急所は？」『婦人倶楽部』1931年8月号)。

妻として良人の愛を獲得しつづけるための工夫や知恵は、評論記事、座談会・インタビュー記事、実用記事と、あらゆる形態の記事をつうじて「啓蒙」されている。それらの記事で述べられている「良人に愛される妻」の要件の第一は、「良人に対し魅力ある異性たれ」(「良人操縦の秘訣百ヶ条」『主婦之友』1925年9月号)という、異性としての魅力の保持である。良妻賢母だけでは不十分である。魅力的な異性であることを忘れてはいけない。良人にいつまでも愛される妻であるために、家事育児にとりまぎれて、女性としての美しさを忘れてはならない。多くの記事が、「良人のために身づくろいせよ」(「良人操縦の秘訣百ヶ条」『主婦之友』1926年2月号)と呼びかける。そうでなければ、男性はすぐに他の女性に目移りをしてしまう。それが家庭崩壊の種になるという警告が発せられる。

「新婚当時こそ美しく粧って居ても、慣れるにつれて段々鏡を見ることも少なくなり、寝乱れた髪、だらしのない着物の着方もおぞましく、終には良人も倦怠期とやらで紅燈の巷に走るようになってしまいます」(安部磯雄夫人阿部こまを「夫の心得妻の心得夫婦和合の急所」『婦人倶楽部』1934年3月号)。「良人の身の回りをきちんとするばかりでなく、自分の身なりも、できるだけ注意して、小綺麗にしたいと思ひます。肌襦袢一つ着換へましても、何となく気持ちが爽かで、それが態度にも行ひにも反映しますから、贅澤に流れない範囲で、浴衣や銘仙の一反も買って着ることは、お勧めしたいと思ひます。髪などでも、ちょっと手入れをすれば、気分が明るくなりますから、家庭に及ぼす影響は大きいでせうね。」(「旦那様のしつけ方発表座談会—円満な家庭生活を営んでいられる奥様方ばかりが家たる夫婦和合の秘訣」『主婦之友』1933年1月号)などなど、驚くほど類似の警告が主婦に対して発せられつづける。

「だらしのない」姿をしないようにするだけではいけない。あまり地味にまとまりすぎていては、夫の関心がうすれていく。夫を惹きつけるような服装、変化をつける工夫を心掛けることも妻の務めとなる。「お嫁様は、家にいるときも、あまり地味な服装でなく、どちらかといえば、多少は派手におつくりをするやうに心掛けてください。そして、今日はお洋服だったら明日は和服、たまには丸まげを結ったりして、いろいろと変化のあるところを御主人にお目にかけておくことも、新妻の魅力を増す秘訣です。そして、もし御主人が、あなたの丸まげ姿をたいへん気に入ってくださったら、これはあなたにとっての有力な武器ですから、あまり乱用しないで、土曜日の晩とか、お散歩に出る約束の日とかに、お用いください」(「奥様学校速成科」『主婦之友』1936年3月号)(Fig.8)。しかし、無論のこと、主婦自身は夫に対して貞節を守らねばならない。良人以外の誘惑に負けてはならないとする忠告も散見される。

## 主婦の美

「美的存在」であることが、「女性一般」に対してより頻繁により高い欲求をもって期待されるようになったことも、近代的なジェンダー秩序の特徴の一つといえよう。当時すでに日常生活上女性を評価する基準として「美」が重要な意味を持つようになっていた。それは、夫婦間の恋愛感情を活性化するためにも必要なものだった。

服装・髪型だけでなく、女らしい情緒あふれる表情やしぐさも大切だ。化粧法・髪型・服装からはじまって、「婦人の美を増す動き(美しい姿態の表情はどうして作るか)」について語り合っている「婦人美についての座談会」(『婦人倶楽部』1929年4月号)、川崎弘子や入江たか子、水の江滝子ら人気女優を集めて「美しい笑顔の工夫」などを語った座談会「人気美人が打

明けた近代的美人法」(『婦人倶楽部』1934年1月号)など、愛される女性となるための身体技法を具体的に指南するグラビアや記事も多い。表情や身のこなしもまた鍛錬が必要な「技巧」と位置付けられる (Fig.9)。

妻は主婦でありながら、良人にいつまでも恋人として愛されなくてはならない。愛されてこそ、家庭は、女性にとっても幸福な楽園となりうる。そうした理念の下に、女性は主婦という枠の中に収まるように女子教育において枠づけされ、さらに婦人雑誌などによって、結婚後も愛され続ける美貌とファッションセンスと身のこなしを学びつづけたのである。

#### 【引用・参考文献】

- 本田和子『女学生の系譜』青土社、1990  
荻谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井朗『新版 教育の社会学〈常識〉の問い方、見直し方』有斐閣、2000  
木村涼子『学校文化とジェンダー』、勁草書房、1999  
木村涼子『〈主婦〉の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館、2010  
小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991  
難波知子『学校制服の文化史—日本近代における女子生徒服装の変遷』創元社、2012  
ラセット『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学』上野直子訳、工作舎、1994 (原著 1989)  
スターリング『ジェンダーの神話—「性差の科学」の偏見とトリック』池上千寿子他訳、工作舎、1990 (原著 1987)  
上沼八郎『近代日本女子体育史序説』不味堂書店、1968

#### 木村涼子 (Ryoko KIMURA)

1961年、愛媛県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士 課程単位取得退学。博士 (人間科学)。専門は教育社会学、ジェンダーとメディアに関する歴史社会学。主な著書に『学校文化とジェンダー』(勁草書房、1999年)、『〈主婦〉の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』(吉川弘文館、2010年、日本出版学会賞、昭和女子大学女性文化研究賞)、編著に『ジェンダー・フリー・トラブル—パッシング現象を検証する』(白澤社、2005年)など。

(※肩書は掲載時のものです)